

2010年1月16日

第33回愛媛県断酒会・愛媛県ワンナイトセミナー

「私の酒害体験」(前篇)

島根県断酒新生会 出雲支部

杉浦 勝栄

(松山市「愛媛県生涯学習センター」にて)

皆さん 今晚は。只今紹介いただきました島根県断酒新生会の杉浦です。今回、愛媛県ワンナイトセミナーにお招きいただき光栄に思うと同時に責任の重さを痛感しており、非常に緊張もしております。

(写真: 中海の中央が大根島・松江市八束町、手前の市街地は鳥取県境港市)



普通体験発表は、例会や研修会では7-8分、大会でも15分位。今まで、30分位の発表をした機会は何度かありましたが、1時間というのは初めてです。そのため、これまで発表した私の原稿を読み返し、さらに肉づけを致しました。今回の体験発表は、まさに自らの体験を掘り起こすこととなり、この機会を与えて頂いたことに感謝致します。

私は昭和20年1月13日生まれで満65歳に成りました。生まれは愛知県豊田市。昭和38年3月高校卒業まで豊田で育ちました。卒業と同時に島根県出雲市へ移りました。普通は、島根から豊田市のように都市部へ就職する人が多いのですが、私はその逆で非常に珍しいケースでしょう。

それには訳がありまして、私の父は一人っ子で、その上先の大戦で戦死しています。祖父と母の3人の家庭でした。母は出雲の出身で、軍隊で父の上官が母の兄だったので、そんな関係で戦時下の昭和18年、出雲から豊田へ嫁いだのです。

祖父は、「身寄りの少ない豊田より、母親の兄弟が多い出雲の方が心強いだらう。俺もお前たちに面倒を見てもらわないと。豊田では見てくれる者がいないので出雲へ付いて行く」。このように祖父の勧めもあり、母は出雲へ戻ったのです。当時70歳を過ぎ、年老いた祖父にとっては勇気のいる決断だったと思います。

私が意識して飲酒したのは高校三年の二学期でした。普通高校でしたが、私たちの年代は5分の1位が大学や専門学校へ進み、ほとんどの生徒が就職する時代でした。当時は、夏休み中に多くの会社の就職試験があり、二学期に入ると生徒全ての就職が決まっていました。部活で仲の良かった五人が、その中の一人の下宿に集まって酒を飲みました。就職が決まっていた気楽さもあって、誰が誘うともなく飲みました。

日本酒一升、サントリーオールド一瓶、ビール三本を飲み干しました。仲間が本格的に飲んだのは初めてだったと思います。かなりの酔いでした。次の日、学校へ登校したのは私だけで、残る四人は二日酔いで欠席していました。その時、私は酒に強いと知りました。

そんなオトコが出雲に来て就職したのが、オトコばかりの職場、「国鉄」です。今にして思えば、自らを酒に強いと知ったオトコが、酒飲みがゴロゴロいる職場に入った訳ですから、その後どうなるかは容易に想像がつくと思います。先輩たちからは、「いいか杉浦、酒が飲めて、仕事ができる一人前のオトコだ」、と教えられました。普通は、仕事ができる上に酒が飲めると一人前と言われるのですが、私たちの職場は仕事より酒が優先していました。

それでも、最初の一年は仕事を覚えたり人間関係を知ることで一生懸命でしたので、飲む機会は少なかったのですが、一年が過ぎた頃から、先輩に誘われたり同僚たちと飲む機会が増えていきました。酒に強い私は、飲むことには自信を持っていましたので、先輩たちから、「杉浦、お前強いのお！」、「いくら飲ませて酔わんのお！」と言われました。

時には、酔い潰れた先輩を家まで送り届けたり、飲み会の幹事を任されるようになり、その都度、「俺は酒に強い、飲んでも崩れない」、という自信を強く持ちました。私は、約20年しか飲んでおりません。高価なライターを飲み屋で失くしたり、帰り道自転車で転んで顔を擦りむいたり、ズボンを破ったりしたことはありますが、それほど問題のある飲み方ではなかったと思います。

家での晩酌は二合の日本酒と決めていました。外で飲む酒も量は多かったでしょうが、二日酔いで仕事を休むとか、仲間に迷惑を掛けるような飲み方ではありませんでした。そのことは、妻が例会でよく言っておりますので、私の思い違いではないと思います。

国鉄がJRに組織変えになったのは昭和62年4月ですが、数年前から民営化に向けての布石は始まっています。その第一は、親方日の丸の考えから民間会社としての頭の切り替えと収益第一主義への取り組みです。100円儲けるのにいくらを経費を要するか、即ち営業係数を如何に改善するかが大きな課題でした。

当時、私は乗務を降りて内勤の仕事をしていました。営業掛です。グループ旅行や団体旅行を扱う業務を担当していました。民間のバス会社との競争を求められていました。民間会社はお得意さんを大切にします。お得意さんを繋ぎ留めるために手土産を用意しての商談、世話役の人たちへはお中元やお歳暮の類を贈っています。しかし、私たち国鉄には営業活動に使える接待費や交際費は一切なく、その差は歴然でした。

私は上司に、「収益を上げよ！と言っても、これらの制度を変えずに民間に対抗することはできん。営業活動に使えるカネを用意すべきだ」、と直訴しました。そうしたら、その時の上司は、「カネがなかったらカネを作れ！」、

と言ったのです。それは明らかに当時の国鉄の法規を破ることで、そんな指示が経営幹部から出るとは考えられませんでした。

(写真はJR西日本出雲市駅北口・出雲市駅北町)--->

しかし、私が直訴して指示が出された以上、現場で自由に使える接待費を捻出しなければなりません。それは、私と直属の助役、そして所属長の三人だけの秘策であり、絶対の部外秘でした。それから約二年を掛けて、およそ140万円の裏金を捻出したのです。その手口は、私も退職して時効になっているので公開しても良いのですが、真似をされると困るので勘弁して下さい。



しかし、「公金を誤魔化して作ったオカネ」。市内の銀行に口座を作ってきちんと出納管理をし、手帳にも詳細をメモしておりました。このオカネがあったお陰で営業成績を伸ばすことが出来たのですが、そのツケはとて大きかったのです。特に昭和59年度からは、支社、管理局からの監査、時には会計検査員の検査が全国の職場に入るようになりました。民営化にするための経理調査です。土地建物の評価、収入金の処理状況、支出のチェックが主でした。

運悪く私の職場には、昭和59年の8月20日頃だったと思いますが、会計検査員が5日間にわたって検査に入りました。片やその道のプロです。素人が苦勞して操作した裏金作りのカラクリを簡単に見破りました。「これで俺の人生も終わりだ！ 20年余り勤めた職場も『懲戒免職』だ！」、と思いました。

当時の国鉄では、管理職は2-3年で転勤していました。裏金作りを指示した助役も、それを認めた所属長も転勤し、この一部始終を知っているのは私だけでしたので、余計に責任を感じたのでしょう。周りの先輩や同僚達が、「杉浦が何か悪いことをしたらしい」、と見ているように思えました。直接私の耳には聞こえてきませんでしたが、私にはそう思えました。まさに針の筵に座る思いでした。

そんなことがあってから、毎日職場へ出るのが恐怖でした。それを癒してくれたのが酒でした。簡単に手に入り、酔って嫌なことも忘れることができました。毎日意識して飲む量を増やし、酔って忘れようとしたのですが酔いが醒めれば、また現実に戻ります。当然のことながら、飲むのに寛大であった家族も飲み過ぎを注意するようになり、さらに酒量を制限するよう言い出しました。

そんな頃、自分の指が小刻みに震えるのを覚えました。私の職場には指が震える先輩が何人もいて、「あいつ、アル中だぞ！」、との陰口を聞いたことも、また指を差された人を知っていましたので……。 「まさか、俺もアル中では！」、としましたが、それよりも懲戒処分の方が怖かったように覚えています。

それから約1ヵ月位の間、管理局に呼び出されての調査がありました。裏金作りを指示した助役や所属長に対する聴取もあったようです。預金通帳や手帳も提出させられ、事実関係の裏付け調査が続き不安な毎日でした。公金を誤魔化した事実はあったが私的流用は無かったこと、そして上司の指示であったことが認められ、心配していた私に対する処分は一切免れることができました。

しかし、心配していた指の震えは治まりません。勿論、この間も酒浸りの毎日でした。仕事には休まず出ていたものの、指の震えは事務職をしている私にとっては致命的です。手が震えて字が書けないのです。算盤の玉が二つも三つも一緒に動く有様です。

そんな時、先輩の「二日酔いには迎え酒をやってみろ、楽になるぞ・・・」の言葉を思い出し、実行してみました。朝、犬の散歩を理由に近所の酒屋へ行き、自動販売機でワンカップ一本を取り出して、その場で飲むのです。そうすると、何とか午前中は指の震えも治まり仕事ことができました。

勿論、酒を飲んで仕事に出掛けるのは悪いことに決まっています。家から職場まで片道3Km あるのですが、いつも酒気帯びか飲酒運転です。これも悪いことだと知っていました。幸いにも事故が無かったのが救いでした。さらに、事務所で先輩や同僚から、「杉浦！酒臭いぞ、飲んで来たのか？」、という言葉もありませんでした。だから、自分では、「これ位の酒を飲んでも、人には分らんのだ！」、とっていました。

しかし、そんな筈はありません。絶対に知られていたと思いますが、誠に自分勝手な考えです。今思えば先輩も同僚も、「いつか気付いて改めるだろう」、と寛大に見ていたのでしょう。その好意には今も感謝しています。

酒の臭いをさせてクルマを運転して仕事に出る。その行為は許されることではなく、家内や母からの苦言は日を追って強くなり、家からは一切のアルコールが消えました。しかし、そんなことで我慢できる様な身体ではありません。さらにエスカレートして、隠し酒と隠れ飲みになりました。

断酒会に出るようになって、多くの人が同じことをして、同じ様な所へ隠していたことを知ることになりましたが、私も誰に教えてもらう訳でもないのに、家の中では、酒を隠す私とそれを捜し出す家族とのイタチゴッコが始まりました。

この頃私が覚えているのは、二度ほど叔父や叔母が家に来て、私はクルマ座の真ん中に座らされ、説教が始まりました。「何だ お前のザマは。朝から酒を飲んで。お前、この子どもたちの父親だぞ。育てる役目があるぞ」。この当時、長女が小学校4年生、次女が3年生、長男が幼稚園の年長組でしたので、当然の言葉でした。

私も自分の立場をよく理解していましたが、既に私はアル中に成っていました。酒が切れた時、アル中の身体に起きる症状は、アル中になったことのない人たちには理解できません。体内からアルコールが切れると、不安とイライラ、そして冷や汗が出ます。とても我慢できません。

「やっと飲めた。飲むとホッとする。これで正常に戻れる」。この安堵感は、正常な酒が飲める人には到底解らないでしょう。説教した叔父や叔母が帰ると、隠しておいた酒を飲むという有様でした。そんな姿を見て母親は残念がり、「こんな息子を産んだ心算はない」、と泣いていました。

(写真は島根県立美術館からの夕日・松江市袖師町)--->



またこの頃、我が家には妻の母親と一緒に生活しておりました。それは、『筋委縮性促策硬化症』という難病に罹っており、妻が、「少しでも面倒を見てやりたい」、という理由からでした。従って、当時の妻は仕事と子育て、家事の他にアル中の亭主を抱えながら、母親の世話で大変だったと思います。

そんな時、妻の母が、「勝っちゃん、身体が酒を欲しがっている病気だよ。病院で診てもらった方がよい」、と言っていたのを聞いています。母親のこんな言葉で妻は、私を入院させようと決心したようです。その当時の気持ちを、妻はよく例会の中で話します。その時は、必ず泣きながら話します。さぞ辛かったのでしょう。現在の私には理解できるのですが……。

当時、妻は出雲の県立中央病院の看護師として働いておりました。精神科の病棟にも勤務した経験もありましたので、アルコール依存症に関する知識は多少あったと思います。いくら知識があつたとしても、亭主の酒を止めさせることはできませんでした。妻として、「私が、何とかして亭主の酒を止めさせよう。でも、精神科には連れて行けない」、と思っていたようです。

しかし、飲み続ける私を見て、妻は入院しないと決心したのです。そこで、アルコール治療をきちんとする病院と医者を探し出し、松江赤十字病院の精神科と全断連の顧問である福田武雄先生に辿り着いたようです。それからは、私を入院させるために妻の説得が始まりました。

時に優しく、時に鋭く私の飲み方や日常生活の問題点を指摘し、入院を勧めました。しかし、私自身アルコールの治療は「精神科」と知っていましたが、精神科に対する偏見を持っていましたので、どうしても精神科の入院だけは避けたいとの思いで頑なに拒否しておりました。

しかし、そんなアガキも長続きする訳もなく、説得が始まってから二ヵ月余りで入院することになりました。その当時の私は、鏡に映る自分の赤黒く腫れた顔を見ながら、止めよう、減らそうと思っても何もできない飲酒を治すには、入院でもしなければ酒を切ることは無理だろうと考えるようになっていました。

妻が事前に病院へ電話して予約を取った日、昭和60年3月20日、遂に松江日赤の精神科へ行くことになりました。その日の朝も、『これが最後の酒になる』と、隠しておいた焼酎「いいとも」の1.8リットルのパックをラッパ飲みした後、一番心配してくれていたイトコと妻に付き添われて松江の日赤病院に向かいました。

朝早く病院に着いたのですが、当時福田先生は診察する患者が多く、午後遅くなってからやっと診察を受けることができました。しかも、出掛けに飲んだ焼酎が切れて、大変辛い思いをしながら診察を待ったこと覚えております。ようやく名前が呼ばれ診察室へ入ると、福田先生は、「杉浦さん、辛い思いをして飲んでいましたネ」と、声を掛けてくれました。

診察を待っている間、妻がワーカーさんに今迄の状況を詳しく説明していたようで、その内容がカルテに記入されていたのでしょう。「辛い思いで飲んでいましたネ」のひと言で、「この医者には、俺の気持ちが分っている」、と思いましたが、次に出た言葉は、「立派なアルコール依存症。アル中です」。

折角辛かった私の思いを認めてくれた医者が、私をアル中と言い放ったのです。その言葉にカッとなった私は、「何で俺がアル中や。俺の職場には、俺よりもっと酷い飲み方をするのが何人もおる」。職場の仲間の名前を挙げながら、悪態をつきました。

しかし、そこは病院の中でのこと。先生は笑いながら、「少し入院して、体を休めましょう」、と言って看護師に即時入院を指示し、5階の病室へ連れていかれました。病名は、アルコール依存症、アルコール性肝炎、高血圧症。しかし、連日のアルコール漬けで、「これでゆっくり休める」、と思ったのも事実でした。

この日から、二ヵ月の入院生活が始まりました。私の記憶では、4-5日の点滴治療がありました。朝はシアナマイドの服薬から始まりました。このシアナマイドも初めての経験で、同室の患者から、「24時間効く、その間にアルコールを飲むとエライことになるので気をつけろ」、と教えられました。

アルコールが切れて正気に戻った時、精神科の入院を悔やみました。松江日赤は混合病棟です。他の病気で入院していた青年が、「オジさん、これかね」、と言って飲む真似をしましたので、「馬鹿にするな。お前とは苦労の仕方が違うわ」、と大きな声を出したと思います。

入院して一週間が過ぎ、シアナマイドが無くなりました。すると、急に酒が欲しくなりました。何とかして酒が飲みたい。そんな思いでした。24時間は効く、酒を飲むとエライことになるとの予備知識はありましたが、「クスリは人によって効き方が違う、ヒョツとしたら俺の場合は大丈夫かも」、とっていました。一日目、二日目とじっと我慢をしながらも、いつしか病棟を抜け出そうと、ずっとその機会を狙っていました。

一番手薄なのは、夕食後の服薬の時です。準夜勤の看護師が二人。一人が患者の服薬に就いていて、もう一人が詰め所にいるのです。三日目の夕食後、私は一番先に服薬を済ませ詰め所を覗くと、看護師は電話の応対中で何かメモをしていました。頭を低くして詰所の前を通り過ぎ、簡単に廊下に出ることができたのです。

「上手くいった」。5階からの階段を跳ぶようにして降り、日赤近くの酒屋の自動販売機で缶チューハイを一本求め、その場で飲み干しました。空き缶は病院の生け垣に投げ入れ、5階の病棟へ走って駆け上がりました。

(写真は天然遡上のアユ釣りが楽しめる高津川・島根県益田市)--->



幸いにも誰にも見つからず、自分のベッドに戻ることができました。飲酒は上手くいったと思いきや、効くはずの無いシアナマイドが、三日目でもまだ効いていたのです。心臓がパクパクと激しく動悸を打ち始めました。鏡を見ると、顔がパンダのように所々が赤くなっていたのです。

布団を頭からかぶり横になっていると、病室のスピーカーから、「夜分ですが、今から福田先生の病室巡回があります」、と放送がありました。看護師は、私が飲んだことに気付き、衣装箱や消灯台を調べました。「杉浦さん、まだ隠しているでしょう」、と隅々まで調べられました。

今考えると、その時福田先生は病室に来ていませんし、施錠されているはずの廊下の扉も簡単に開けられたのも不思議です。先生は私の日頃の行動に不審を感じ、私を泳がしていたのでしょう。昨年12月20日、クリニックを閉じた福田先生宅を訪ね、歓談する機会がありました。あの時のことを先生に話し、「何故、あの時強制退院をさせなかったのですか」、と尋ねたのですが、先生は笑うだけで何も答えませんでした。

酒を止める気もなくアル中を否認していた私が、あの時強制退院させられていたら、何回か入退院を繰り返しながら、おそらく今頃は泥の底に沈んでいたでしょう。全てがこんな具合の入院生活だったので、看護師や先生にはことごとく反発していました。それでも不思議なことに、福田先生の言葉や教えの幾つかは今でも鮮明に覚えています。

★アル中は、現在の^{いま}医学では治す薬もないし手術も出来ない。酒を飲んで死ぬ道を選ぶのか、断酒して普通の生活に戻るのか、君たちには二つの道しかない。どちらを選ぶかは君自身が決めること。ホワイトボードに図を書いて説明されました。

★飲まない道を選ぶなら、断酒会へ行きなさい。酒で痛めた身体は薬で治せるが、医者には君に酒を止めさせることはできない。止めさせてくれるのは断酒会の仲間です。

福田先生は、よくこう言います。「断酒会に行こうや、断酒会に行こうや」。この医者は断酒会しか言うことを知らんのかと思いました。私は、「分かった、行ってやる」、「断酒会という名前を変えたら出てやる」、と応えていました。

入院中、松江市内の例会にも行かされましたが、全く反省のない私が聞く皆さんの体験談は、飲んだことが自慢話に聞こえて、飲んでいて身体は決して酒を忘れないと思っていました。断酒会で何年も止め続けている人の話を本気で聴くことができず、耳を塞いでいたと思います。

もう一つ、腹の立ったことがあります。それは退院の10日ほど前、診察室でのことでした。福田先生が、「君の職場の電話番号と直属の助役の名前を……」、と尋ねたので教えました。すると、診察室の電話のダイヤルを廻していました。電話の相手に、「私は日赤の福田です。杉浦君の主治医です。〇〇助役はおられますか？」と上司を呼んでいました。

上司が電話口に出たのでしょうか。すると福田先生は、「彼は、アルコール依存症のため治療中ですが、この病気は医者でも治せません。ただ、飲まないために断酒会があります。職場も今大変忙しい時期と聞いていますが、どうか杉浦君を断酒会へ行かせるために協力して欲しい。残業や持ち帰りの仕事をさせないで欲しい」、と頼んでいました。

傍で聞いていた私は、余計なことをする医者だと思いました。私の了解もなしに、酒のために入院していると話していました。たった一本の電話で、私がアルコール依存症で入院していると職場の皆に知れ渡ることになるからです。二カ月の入院ともなると診断書を職場に提出するのですが、担当者だけで処理されるので、広く知られることにはならないと思っていました。

電話で直接上司に全てを話したのですから、職場に知れ渡ることになりました。しかも、断酒会に行くために残業もさせないで協力して欲しいと言ったのです。しかし、この電話のお陰で、私は残業もせず、仕事を終えることができました。しかも、先輩や同僚は、私が断酒会に行くことに一言の文句も言わず、しかも全面的に協力してくれたのです。(了)